
いつかのあの子

りいち

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

いつかのあの子

【Nコード】

N3196Q

【作者名】

りいち

【あらすじ】

8年ぶりに偶然見かけた『あの子』。今も昔も、慰められたのは私の方だったのかもしれない。残酷で優しい記憶が蘇る

家から随分と離れた塾からの帰り道、8年ぶりにあの子を見かけた。もうあの子などという呼ばれ方をする歳ではないのは解っているが、彼を見た瞬間に『あの子だ』と思わず呟いてしまった。

工事現場でにつかぽつかを着て木材を運ぶあの子は、8年前よりずっと遅しく、ずっとずっと男らしく成長していた。思わず足を止めて見入ってしまうくらいに。

まだお互いが小学校低学年だった頃。私とあの子は同じ団地に住んでいた。同じ団地と言ってもそこは大きな公団で、棟は違うし、滅多に会うこともなければ一緒に遊ぶことも当然なかった。しかし私はあの子の事を知っていた。それはあの子が団地で一番有名な子供だったからだ。

あの子は子供ながらに恵まれた容姿を持ってはいたが、その性格は歪んで醜いものだった。何故そのような育ち方をしてしまったのかと云うと、それはあの子の家庭環境にあった。

あの子には父親がおらず、水商売をしていた見た目も中身もまだや

んちな若い母親に育てられたからである。

黙っていれば美少年。しかしその口について出る言葉は、たとえ親切で話しかけたとしても『うるせえ、死ね、馬鹿』など相手の心を深く抉るものばかり。

酷い態度故に、大人も子供もあの子に近付こうとはしなかった。そして常に、暇を持て余した主婦達による悪口の格好の的だった。

それは子供の世界でもそうだった。

団地には同じ年代の子供が他にも沢山いた。

敷地内の立ち入り禁止区域に底なし沼と呼ばれる深い沼があったのだが、大人の監視をかい潜り、何人かで探検へ行った時にあの子が現れたと言うのだ。そして『ここは俺の秘密基地だから二度と入ってくるな』と追い返したらしい。それから誰も底なし沼へ近付かず、それと同時にあの子は益々孤立していった。

だから、お母さんに怒られて公園で一人泣いていた私に、あの子が話しかけてきた時は驚いた。

まだ夕方とはいえ、もうじき日が暮れる。冬場は特にそれが早い。子供が一人で彷徨くには十分危ない時間である。

公園の砂場にしゃがみ込んで泣いていた私は、街灯に照らされたあの子の顔を見た時つい逃げ出しそうになったがそうしなかった。ただ単に足がすくんだのだ。

「こんな所でなに泣いてるんだよ」

子供にしては威圧感のある声でそう尋ねてきた。言葉を放り投げるような話し方だった。

「怒、られ、て」

しゃっくりを上げながら私は答えた。

何だそんな事かと言いたげにあの子がふうんと唸る。

触れると柔らかかそうな髪の毛に、白い頬。薄い唇をきゅっと結んで終始取っ付きにくそうなかめっ面をしている彼は泣いている私を見てどう思っているのだろう。ざまみろとも言いたいのだろうかと試行錯誤しながら再度顔を上げると、ざまみろなんていう汚い言葉、まるで知らないかのような美しい顔をしたあの子が真っ直ぐに私を見詰めていた。

「……お前の親は？」

相変わらず威圧感があるのは、妙に彼が大人びた言葉を使っていたからだろう。

普通なら『母ちゃんは？』と訊くところを『親』と言った。今まで彼が甘えることを許されなかった劣悪な環境を残酷なまでに現していた。

あの子が周りに対して少しでも不幸で弱い子供の表情を見せて同情を買っていたら、悪口のネタになったりはしなかったのかもしれない。

私は自分を落ち着かせる為、胸で大きく深呼吸をした。そして家がある棟の方を指差した。

「……家。お母さん怒ってるから、帰れないの」

あの子は表情を変えずにまたふうんと唸った。

私が、きみは帰らないの？と尋ねても曖昧に首を捻るだけだった。

後で聞いた話によると、あの子の家にはよく借金取りが来ていたらしい。その上母親は滅多に家に帰らず、昼も夜も幼いあの子ひとり借金取りの罵倒に耐えなければならなかったという。だから彼は家に帰らなかつたのだ。

そんな事を知らずに聞いてしまい、あの子は傷付いただろうかと思ひ返してみるけど、あの時は特に悲しい表情は見せなかつたように思える。かと言って疎ましそうに顔を歪めるでもなく、ただその美しい顔で凜としていた。

「そうか。じゃあお前暇だな。俺が勉強教えてやる」

「え！」

私の承諾も得ずに、あの子は長い木の棒で地面に何やら難しい数字を書き始めた。小学生が授業で習うような代物ではない。並べられた数字を見ながら勝手に話し出すあの子。何一つ私の頭には入らなかつた。

今思えばあれは因数分解ではなかつただろうかと思う。何故そんな数式をあの子が知っていたのかは今でも解らない。

厄介なのに捕まってしまったと思ひながら逃げ出すことは出来なかつた。あまりにも真剣に語るあの子の俯き顔が綺麗で、そっちの方に意識を取られてしまったのだ。

しかしそうして5分も過ぎると流石に飽きてくる。傾いていた赤い夕日は、いつの間にか夜の帳へと吸い込まれようとしていた。

相も変わらずただ頷くだけの私に、あの子は熱心に呪文のような数式を語り続けていた。

私なんかこんな話をして楽しいのかな。あーあ、こんなことなら

お母さんが怒り出す前におもちや片付ければ良かった。漠然とそんな事を考えていると、木の棒を持つあの子の手がピタリと止まった。あの子が私の方を見ている。いや、正確には私の向こうにいる誰かを。

不思議に思い、視線の先を辿ろうと振り向けば、離れたところからこちらに向かつて手を振っているお母さんの姿があった。

夕飯の支度の途中なのか、腰にエプロンを巻いたままのお母さんは笑顔で私の名前を呼んだ。ご飯できたよ。早く帰っておいで、と。

お母さんが迎えに来てくれた！全てを包み込んでしまうようないつもの暖かい笑顔で。

私は思わず立ち上がり手を振り返す。お母さんの姿を見て安心したのか、わっと泣き出してしまった。

また泣き出した私を見てあの子は馬鹿にしてくるかもと罰が悪くなり振り返るが、良かったなと数字を語っていた時よりも落ち着いた声でそう言った。

これでやっと帰れる。もう訳の分からない話を聞かなくていい。

そんな喜びと同じくらい戸惑いが生まれた。

彼をひとり置いて帰ることに罪悪感を抱いたのだ。

だけど、難しい話はもう聞いていたくない。

手を振り私を待っている母親と、未だしゃがみ込み、先程まで地面に書いていた数字を木の棒でぐちゃぐちゃと消している子。交互に見つめながら困っていた。

「もう喧嘩は終わったか」

「え……?」

「お前の母親、迎えに来たんだろ」

それまで饒舌に語っていた数式を何事もなかったかのように切り上げ、鉛筆代わりに使っていた木の棒を遠くへ投げたあの子。

そしてあの子はゆっくりとした動作で立ち上がり、また凜とした表情で私を見た。

私はどうすれば良いか分からず立ち尽くしていた。

だってもう、日は暮れている。それに気が付くと今度は気温までぐんと下がったように感じて身震いした。

そういえば、彼は薄いトレーナーしか着ていない。かじかんで真っ赤になった指先が震えているように見えた。

どうしてなのかは解らないが、あの子は私の心情を読んだようだった。

「俺のことは気にするな。お前は家に帰れ」

威圧感があるのは変わらないが、今度はそれだけでなくどこか相手を気遣う声音を含んでいた。

そしてあの子は私の後方へ視線を投げた。導かれるようにお母さんの方へ首を向けると、未だ手を振り私を呼んでいた。

私もそれに応え、おかーさんと声を張り上げる。涙はもう乾いて

いた。

「……私帰ってもいいの？」

お母さんに呼ばれていると思うと、どうしても駆け寄りたい衝動に駆られ、残酷な質問をしてしまった。

ただその子は変わらない表情で『当たり前だろ』と軽く受け流す。

「私がお家帰ったら、ゆうとくんもお家帰る？」

どさくさに紛れ初めてその名を呼んでみると、彼は一瞬表情を崩して黙り込んだ。

初対面の子供に名前を呼ばれ驚いたのかと思ったがしかしそれは、こいつも自分の名前を知ってたのか、という落胆の表情にも見え、私は名前を呼んだことを少しだけ後悔した。

そしてその子は黙り込んだ後、『帰るよ』と少しだけ口元を緩めて自嘲気味な笑みを浮かべた。

その小さな微笑みがあまりにも綺麗で、自分の顔が少しだけ熱を帯びたのが分かった。

「ゆうとくんがお家に帰るなら、私も帰る。さっき教えて貰ったことは……お家に帰ってお母さんと勉強するよ」

その子はまた一瞬だけ口を閉ざした後、それはもういいと首を振った。

「お前には、まだ分からねえだろうし」

「じゃあ……大っきくなったら勉強するよ」

「覚えてたらな」

ほら、とあの子は私のお母さんの方を視線で促す。

母はそこで初めてゆうつとくんの存在に気が付き、振っていた手を下げて仰々しく頭を下げた。

彼も当然それに気が付いただろうが、表情を変えるでもなく頭を下げるでもなく、景色の一部として視界の端にその姿を捉えただけだった。

「気を付けて帰れよ」

そう言いながらも既に一步を踏み出したゆうつとくんの背中を目で追いながら、『うん、ゆうつとくんもね!』と応えた。

それに頷きもしなければ、振り返りもせずに夕闇に伸びる道をその年齢以上にしっかりと歩いて行く。

私よりもずっとずっと確かなその足取りは、彼が子供ながらにいかん苦労して生きてきたのかを物語っているように思えた。

よろけても誰にも寄りかかれない。転んでも誰も起こしてくれない。茨の道を自分の足で歩いていかなければならない。

私はまたあの子がひとりになるのが可哀想に思えて母の元に帰るのを躊躇した。だけどそれはあの子にとつたら余計なお世話だったかもしれない。

お前なんか心配される筋合いはないと、本当は言いたかったのか

もしれない。

ゆうとくんは本当に家に帰るの、家には誰か待っていてくれる人はい
るの、そう聞こうとしたが言葉が口元から零れ落ちるよりも先に、
彼が見せたあの綺麗な微笑みが脳裏をかすめて何も言えなくなった。

あの時あの子は自嘲気味に笑ったけど、あれはどういう意味だった
のだろう。少し躊躇してから『帰るよ』と言ったあの空白。

本当は家に帰っても誰もいないのではないか。私を帰す為に嘘をつ
いたのだとしたら……

「あの……ゆうとくん！」

彼は闇に染まる周りの情景には目もくれず、ただ真っ直ぐ前を見据
えて歩いている。離れていく背中に私は何度も呼び掛けた。

最初こそそれを無視していたものの、二度三度繰り返す内に、彼は
面倒臭そうに足を止めてこちらを振り返った。

「なんだよ。うるさいな」

「ごめん！でも、言い忘れたことがあって……」

若干鬱陶しそうに私を見たあの子に怯んで泣きそうになってしまっ
た。けれどあの時『帰るよ』と言ったあの子はもっと泣きたかった
だろうと自分を戒め奥歯を噛む。

そしてこちらを見つめる小さなあの子に、自分が持てるだけの精一
杯の優しさを込めて、ありがとうと言った。そして、最後に、また
ねと付け加え大声で叫んだ。

やはりあの子は何の反応も示さなかったが、確実に私の声は届いただろう。それだけでいい。伝わらなくても、聞こえただけでいい。

小さくなって今にも消えてしまいそうなほど遠くまで行ってしまったあの子に、絶対に聞こえないと分かってはいたけれど、もう一度ありがとうと呟いた。

そして私もまた、踵を返して母の元に走って行くとした。

自分の地面を蹴る音に紛れてあの子がこちらに向かって何か言った気がしたけれど、振り返った時にはもう既にあの子は再び背中を向けて歩き出していた。

それが私の勘違いだったのかは今でも分からない。

小さな足を精一杯前へ前へ動かし、やっと駆け寄ってきた娘を母は大きく手を広げて受け止めてくれた。

ごめんなさい、と謝ればまた涙が溢れてしまった。

しかし今度はそれを隠すことなく母に泣きついた。こんな事である子は私を笑ったりししないと知っていたから。

母の匂いがした。柔らかな身体に抱き付くと、母は私をぎゅっとその手に包んで言った。

「咲ちゃん、竹内さんちの子と一緒にだったのね」

母の声が軽い。ぱつと顔を上げると

そこには何故か嬉しそうな母の笑顔があった。

「うん！勉強教えてもらったよ！」

「そう、良かったわねえ」

母は更に嬉しそうに声を弾ませて私の手を握った。そして二人で手を繋いだまま、家へと帰る。

「あの子、口は悪いけど本当はとっても優しい子なのよ。この前、お母さんがスーパールの袋を両手に抱えてたら、見かけたあの子と一緒に部屋の前まで持ってくれたんだから」

初耳だった。私は驚いて母を見た。どうりで嬉しそうに頬を緩ませているわけだと。

「今日もきつと、咲ちゃんがひとりでいたから放っておけなくて一緒に遊んでくれたのね」

母は、他の子のお母さん達とは違った。ちゃんとあの子を見ていた。そんな母を私は心から誇りに思い、握った手に力を込めた。

口が悪くても、態度が悪くても、人を気遣うことのできる心根の優しい子。厳しい環境故に年齢以上にしっかりと育ってしまった子。あの子はただそれだけの普通の子供だったのだ。虚勢も乱暴な言葉もそれら全て、あの子が見せる精一杯の健気さだと誰が気付いただろう。

また明日会ったら、今度は私から声をかけよう。

しかしあれ以来、私があの子に会うことはなかった。

あの子は一週間で経たないうちに、団地から引っ越してしまったのだ。

借金取りに追われて夜逃げをしたやら、母親が男と逃げたから施設に預けられたなど根も葉もない噂が暫くは飛び交ったが、どれも信

憑性はない故ひと月も過ぎると風化していった。

そして、あの底なし沼にはまた子供達が入り出すようになった。しかしその内のひとり足が滑らせ、沼に落ちたことで団地ではちよつとした事故として扱われた。

誰かはそれを『あの子の呪い』だと言ったけど、私は違ふと思った。今まであの子がみんなを底なし沼に近付けようとしなかったから、誰も事故を起こさずに済んでいたのだ。

そして今、15か16に成長したあの子が私の目の前で汗を流して働いている。

汚れた作業着に、首には真っ白なタオルを巻いて。

何年も会っていなかったのに、あの子の存在すら記憶の片隅にしかなかったのに、彼の姿を見た途端に私はあの子だと確信してしまった。

だって、初めて話した時よりもずっと前から、私はあの子の姿を目で追っていたのだから。

蘇ってきた記憶を辿り、あの子の綺麗な笑顔を思い浮かべて目の前の彼と照らし合わせる。寸分の狂いもなくそれはピタリと当てはまった。

彼は同じ作業着を着た仲間達と、時折談笑を交えながら木材や土を運んでいる。

家には彼の帰りを待っている誰かがいるだろうか。仕事で疲れた彼を温かく迎えてくれる人がいるだろうか。そうだといいな。

私はすっかり彼に魅せられ、動けずに立ち尽くした。肩にかけた学生鞆のストラップが風に揺れる。

あの時と同じような真つ赤な夕日がどこからかやってきた闇と溶け合おうとしている。

沢山の人が行き交う交差点の一角で、私は遅しくなったあの子の姿を目に焼き付けようとした。

すると、ふいにあの子がこちらを見た。

鼓動が早くなつた。確かに今、視線が合っている。

感情を表に出すことをしなかったあの頃のあの子と同じ、凜とした瞳に射抜かれ硬直するが、数秒も経たないうちにまた彼は視線を元に戻してしまった。

私は途端に泣きたくなつた。それはあの子と視線が合ったからではなく、その視線をそらされたからでもない。

目頭が熱くなり、心臓が圧迫され、喉の下がぎゅーぎゅーと締め付けられた。

あの子が生きている。

こんなにも、力強く、人の輪の中で。

堪らなく嬉しかった。あの子からすればそんな私の感情はお節介にも程があるが、あの子がたった一度だけ見せた綺麗で悲しい笑顔が脳裏に焼き付いて離れないのだから仕方がない。

勇気を出して一步を踏み出し近くまで歩み寄る。

体の周りを砂埃が舞った。

突然近づいてきた女子高生をあの子は……彼は不審そうに見上げな

がら威圧感のある声を出した。

「なんか用ですか」

「……」

ぐつと言葉が詰まった。

彼は私のことなんて覚えていなかった。当然だ。後にも先にも、話したのはあれだけだったのだから。

でも決めたんだ、あの時。また会ったら、今度は私から声をかけるって。

夕日に照らされて彼の汗がきらりと光る。そして強い瞳に見詰められて一瞬目眩を覚えた。あの、と声をかけるより先に彼は言う。

「用がないなら、邪魔なんで」

反射的に、ごめんなさいと消え入るような声で応ると、彼は何か言いたげにじっと見据えてきた。しかし、言葉を発する気配はない。やっぱり駄目だと諦めた。諦めて、帰ろうとした。

あの子にとってはやはり、とるに足らない記憶だったのかという恥ずかしさからくりと背中を向けて急いで交差点の方へ戻ろうとする。

工事現場から数メートル離れた時、すかさず追ってきたのは、背中にかかる彼の、あの子の、ゆうとくんの、声。

「俺の話はつまらなかつただろっ」

私はもう既に瞳いっぱい溜まっている涙を拭うこともせず振り返った。

そんなこと、ないよ、と震える声で答える。

「そうか？あんな話、黙って聞いてくれたのはあんただけだった」

木材が積み上げられる音に混じって、ありがとうと彼は言った。お礼を言いたいのは私の方なのに。

そして今まで失礼な誤解をしていたことや、本当はつまらなかつた勉強のこと、幼さ故に放ってしまった残酷な言葉を謝りたかつたのに、言葉が喉につかえて出てこない。

何も言わない私を見て少しだけ笑みを零すと、彼はまた何事もなかつたかのように作業に戻ってしまった。あの日と同じ、しっかりとした足取りで。

私はまたその姿を少しの間見送ると、地面を踏みしめ、力強く一歩足を踏み出した。彼とは逆の方向へ。

そして思った。あの時、地面を蹴る音に紛れて消えて入ったあの子の言葉は、『ありがとう』だったんだな、と。

いつかのあの子

(夕闇に消えてゆく)

私は早足に交差点を渡った。鞆が揺れるたびに中のノートや筆箱ががちゃがちゃと音を立てる。

早く家に帰ろう。早く帰って、お母さんの作ってくれる夕飯を食べるのだ。そのあと今日塾で習ってきたばかりの難しい数式をノートいっぱい書こう。いつかのあの子のように。

人ごみに埋もれてしまいそうな駅に向かって、私は勢い良く駆け出した。

夕日は、今にも西へ墜ちる。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3196q/>

いつかのあの子

2011年1月26日03時27分発行